

疑似就労場面における「仲間を教える」役割設定が 高等部生徒の行動におよぼす効果

The Effects of the Role of Teaching Peers on the Performance of Special High School Students in the Training of Simulation Shop

○小島 遼・吉尾玲美・水野しおり・立花周太・渡辺 舞・中妻拓也・中鹿直樹・望月 昭

KOJIMA R, YOSHIO R, MIZUNO S, TACHIBANA S, WATANABE M, NAKATSUMA T, NAKASHIKA N, MOCHIZUKI A

(立命館大学)

(Ritsumeikan University)

Key words: Effects of Teaching Setting, Simulation Shop, High School Students, Student Job Coach

目的

就労場面において、個人がキャリアアップ(正の強化による職務拡大)するための環境の1つとして、人に仕事を教える場面が考えられる。教授者、支援を行う者として働くことで、新たな行動を示す機会を得ることができる。また、杉江・梶田(1989)は、「教えるという構えを持って学習することは個人の学習を効果的にする傾向が認められる」と指摘していることから、教えることは教授者自身にとってポジティブな効果をもたらすと考えることができる。本研究の目的は①人に教えることが教授者自身のパフォーマンスに与える影響を検討すること、②教える環境が参加者たちのキャリアアップに対して持つ意味を検討することの2点であった。

方法

参加者 特別支援学校高等部1年に在籍するAとBであった。AとBは共に知的障害があり、Bは筋疾患のため車椅子を使用していた。**期間** 20XX年Y月の10日間であった。**場面** 模擬喫茶店舗における接客業務を行った。商品の作製は店員役の学生が行い、参加者たちは商品の提供と会計を行った。支援者は立命館大学学生ジョブコーチ(以下SJCと表記;望月他,2010)であった。なお、Bが教える対象として大学院生Cが初心者であるように振る舞った。**手続き** 表1に、各参加者の実習スケジュールを示した。表中の「教授」とは自分も仕事を行いながら仕事を教える立場であること、「被教授」とは仕事を教えてもらう立場であったことを示す。SJCは教授者に対して、被教授者に仕事を教えるように言語指示を出し、適切な教える行動に対しては言語賞賛を行った。参加者が2名いる際は、教授者と被教授者が交互に接客を行い、被教授者が接客を行う際には教授者が仕事を教えた。それ以外の期間はSJCの支援のもとで接客を行っ

表1. A, B, Cの実習スケジュール

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目
A	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←
B	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←
C	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←

た。教える場面でBが示す行動を確認するために、Cは

仕事ができないふりをした。

結果・考察

図1にAとBの接客における自立遂行率を示した。AはBを教えるよう教示を受けた直後に接客に関する手順書を手にとって見直すという行動を自発し、その直後の自らの自立遂行率を上昇させた。教えることで教授者のパフォーマンスが改善するのではなく、教えるための準備行動がパフォーマンスに影響したことが示唆された。

AとBは教える場面に固有な行動を多く示した。Aと

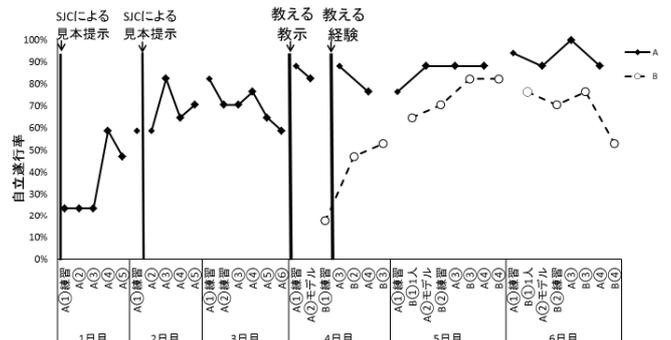


図1. 接客時におけるAとBの自立遂行率の推移 Bの接客時にはAが仕事を教えた。B1人のセッションでは、AではなくSJCが支援を行った。Aのモデルセッションでは、Bが接客練習を行っているAを見ていた。練習やモデルではないセッションは、店舗営業時に来店した客に対する接客であった。

Bは、手順書をもとにした言語指示や指さしを用いて仕事を教えることができていた。さらに、AはBの正反応に対して盛大に拍手や賞賛を行い、またBの自立遂行率の上昇に応じてフェイドアウトするという好ましい教授行動を示した。Bは、Cから発言を聞き返された時には手順書を指さしながら指示を出すというモードの変換を示した。以上のように、「教える」役割設定の導入により、両名は新たな一面を示すことができたといえよう。

当研究は、文部科学省戦略的研究基盤形成支援事業(2013-2015)、ならびに立命館大学R-GIRO(2010-2014)の支援を受けた。

引用文献

望月昭他(編著)(2010) 対人援助学の可能性. 福村出版.
杉江修治・梶田正巳(1989) 子供の教授活動の効果. 教育心理学研究, 37(4), 381-385.